

〔様式11〕

(対象事業：1、地域の中核館として他館や他機関等と連携して行う事業
2、先進的な展示・教育普及手法の開発等の事業)

事業名：三島から世界へ発信！ 佐野
美術館版 日本の美術ガイド

事業者名：財団法人 佐野美術館

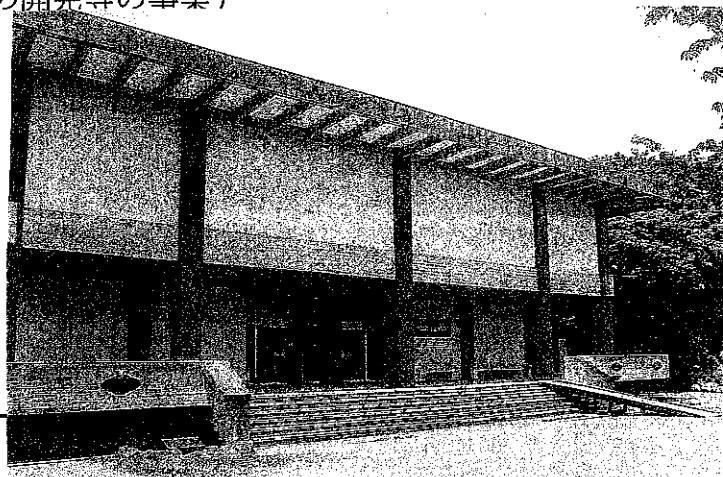
連携事業館名：日本大学国際関係学部
(三島キャンパス)

住所：静岡県三島市中田町1-43

TEL：055-975-7278

FAX：055-973-1790

HPアドレス：<http://www.sanobi.or.jp>



① 施設概要

佐野美術館は昭和41年、佐野隆一のアートコレクション（3000余点）・土地・建物の寄付により開館。ほぼ1ヶ月ごとに特別展および企画展を開催し、静岡県東部の文化拠点として活動。土曜日は小中学生無料、周辺の私立中学1校、公私立高校10校、私立大学1校と協約を結び、在校生と職員、同伴の家族2名まで無料入館にするなど、地域の青少年に対して芸術に触れる機会を提供している。

② 事業の意図目的

佐野美術館のコレクションの中から、日本刀をはじめ、陶磁器、能面・狂言面、絵画を題材に、日本の美術のガイドを作成。当館は開館以来、東部の文化拠点として県民に親しまれてきた。国内の教育・文化施設における国際化への対応が求められる昨今、日本美術を紹介する美術館は今後、重要な役割を担うこととなろう。近年、当館を訪れる外国人が増えてきている。そこで、ガイドは日本語と英語の併記とし、外国人が、当館コレクションの鑑賞を通じて日本の美術に親しむ機会を提供するとともに、国際交流に携わる日本人が、外国人に日本の美術を紹介する上での手引きとなることを目指す。

③ 事業概要

当館と入館協約を結ぶ日本大学国際関係学部と連携し、同大学の外国人教授、英語教授と当館とによるガイド制作チームを組織し、作成。作成したガイドは県内外の国際交流施設や団体、教育機関、観光施設に配布し利用を推奨した。また日本大学国際関係学部の授業での活用、三島市および周辺市町の住民や国際交流関係者を対象とした当館で初心者向けの美術鑑賞講座（日本刀ギャラリートーク）を行うことで、地域との連携をはかった。

④ 事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト

名称『佐野美術館コレクションに見る 日本の美術ガイド』

作成した報告書等 なし

⑤ 参加者状況

参加者人数 延べ 135人

内訳 日本大学国際関係学部での授業 70人

日本刀ギャラリートーク 35人

(1・2) 事業の実施状況および地域との連携について

①佐野美術館の概要および日本の美術について紹介するテキストとして活用

実施場所：日本大学国際関係学部 4年生

実施日時：1回目 平成18年1月17日(火) 10:00～10:30

参加人数 「通訳法」授業内 20名

2回目 // 1月20日(金) 15:40～16:10

「Japan studies」授業内 35名

3回目 // 1月24日(火) 10:00～10:30

「通訳法」授業内 15名

指 導：梅本順子先生（日本大学国際関係学部教授）

講 師：佐野美術館スタッフ2名

内 容：佐野美術館の概要、日本の美術ガイドの内容について、
ガイドに掲載された作品について、質疑応答

②佐野美術館の主要コレクションである日本刀を初心者向けに解説する
ギャラリートークのテキストとして活用

実施場所：佐野美術館展示室

実施日時：1回目 平成18年2月25日(土) 11:00～11:30

参加人数 10名

2回目 // 3月4日(土) 11:00～11:30

10名

3回目 // 3月11日(土) 11:00～11:30

15名

講 師：渡邊妙子（佐野美術館館長）

内 容：日本刀と武士、日本刀の種類と特徴、日本刀の反りの形、刃文の鑑賞
拵の役割・種類と特徴、刀装具の役割・種類と特徴

(3) 成果物について

『佐野美術館コレクションにみる 日本の美術ガイド』

- 1、目的 佐野美術館の多岐にわたるコレクションの特色を生かし、日本美術の基礎知識を学ぶ冊子を作成。地域の観光施設を紹介することで、三島の歴史や文化、自然を知るガイドとして、また国際化への対応が求められる時代、英文訳をあわせ掲載することで、日本の文化に関心を寄せる外国人や外国人に日本文化を紹介するテキストとしても、広く活用できるものとする。
- 2、対象 一般（中学生以上）
- 3、体裁 B6版・オールカラー・20ページ
- 4、部数 50,000部
- 5、ガイドの内容 佐野美術館の日本美術コレクションの中から、日本刀、陶磁器、能面・狂言面、絵画作品を選び紹介。名品解説ではなく、当館の作品を題材に、各々の歴史や特徴、鑑賞法など、広く日本美術や文化を紹介する内容とした。

頁	内容（大項目）	内容（小項目）
表紙	表題	
1	佐野美術館	佐野隆一と佐野美術館
2		佐野隆一と隆泉苑
3・4	日本刀	日本刀の歴史・日本刀の種類と名称
5		日本刀の鑑賞
6		日本刀の材料・工程
7	陶磁器	日本の焼き物
8・9		美濃焼の鑑賞
10		茶の湯と美濃焼
11	能面・狂言面	能・狂言の歴史
12・13・14		能面・狂言面の鑑賞
15	絵画	日本の絵画の歴史・材料と特徴
16・17		日本の絵画の鑑賞
18	周辺観光・地図	
裏表紙	美術館利用案内・交通手段・奥付	



「日本刀ギャラリートーク」



「佐野美術館コレクションにみる 日本の美術ガイド」

(4・5) 参加者の反応・芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

本事業の実施は、当館にとって、新しい交流が生まれたこと、それにともない地域における美術館の役割とは何かを、再認識させられる契機となった。

日本大学の授業への参加は、当館にとって初めてのことであった。同大学と当館とは入館協約を結び学生は自由に当館を見学できるのだが、来館したことのある学生は、1授業につき数人であった。さらに、他の美術館に行ったことのある人を尋ねると、東京の美術館で西洋絵画を鑑賞したことのある学生は、当館への来館人数よりやや多く、国際関係学部ということもあるのだろうが、欧米の文化へのより高い関心がうかがわれた。そこで、ものづくりの技の高さや繊細な感性において、日本人は世界随一であり、それは日本の美術作品に如実に現われていること、今は映画やアニメーションの分野でも日本人が活躍し、世界に注目されていること、これから世界を舞台にする学生に、是非日本文化を伝えてもらいたいことなどを話したところ、中には日本の美術に大変関心の高い学生もいて、ガイドを読み進めていくうちに、「日本刀の刃文はどのようにして作られるのか」「能面にこれほどの種類があるとは知らなかった。どんな物語があるのか、物語によって使われる能面は違うのか」といった質問が寄せられた。この授業に参加して、今後は当館からも積極的に学校へ出向き、学生たちに直接日本美術の素晴らしさを伝え、関心をもってもらうことの必要性を感じた。また授業担当の先生も、今までは日本の生活習慣や行事、政治や経済について英語でどう伝えるか、という授業をしてきた、日本美術は専門ではないので、ガイドの作成に参加して勉強になった、今後このガイドをテキストにを使って授業をしてみたい、また美術館から当校へ話しに来て欲しい、との声を掛けていただいた。

日本刀ギャラリートークについては、ガイドに基づいた内容を展開させることで、日本刀は難しそう、というイメージを変えることとなった。西洋の剣と日本の刀との大きな違い「反り」は、人体の曲線に基づいた姿をしていて、少ない力で最大限の効力を発揮する武器であること、武器のみならず自身の精神を反映する鏡であること、拵は今でいうネクタイやベルトのバックルなどに相当し、男性のお洒落であったので、様々な個性や趣向を凝らした拵が生まれたこと、など、専門用語を少なくし具体例を用いての説明は大変分かりやすく、特に女性の聴講者に好評であった。来年初夏に開催される当館の所蔵品展でも、今回のような手法を用いて、より多くの方々に美術に親しんでもらうギャラリートークを企画している。そして地域の芸術文化の活性に貢献したいと思う。

また、ガイドの配布先から「このようなガイドは今までになかったので、学校の授業でテキストとして用いたく、あと〇〇部送ってほしい」などというリクエストを数多くいただいている。それは予想外の嬉しい声であった。その中には「今度、佐野美術館を訪ねたいので、ガイドをテキストに今、勉強会を開いている」という、通訳ボランティアの活動をしているグループの声もあった。

現在市内には数千人の外国人が住んでいる。当館へ来館する外国人も増えてきてはいるが、居住の割合からするとほんのわずかである。今後、当館が県東部の文化拠点を超えてより広範囲に、更に国際化に向けた取り組みを進めていくには、当館だけの力だけ

ではなく、日本大学や通訳ボランティアなど、国際交流の活動を行っている施設や団体の協力が不可欠である。本事業の実施は、その人々との繋がりが生まれ、今後の美術館の歩むべき道筋をつけた、という意味において、大きな成果を挙げることができたと考えている。